

ふれあい散歩道－3

大山街道沿いの「文学碑」と「産業の歴史（工場見学）」

散策後「老舗料亭やよい」でお茶を飲みませんか？

江戸城の西（乾）の方向に開かれた大山街道は、多摩川を渡ると「多摩の横山」への一筋道「大山街道」に入る。大山や富士信仰の道として栄え、主街道である東海道の脇住環として、100万都市江戸を支える交易の道の役割を果たしてきた。大正末期には、二子の渡しに代わり、二子橋が完成、玉電が乗り入れ「東京の郊外」溝口は最盛期を迎える。独特の景観と雰囲気を求めて、明治時代から多くの文学者が訪れた。短い街道にも関わらず街道周辺には10数ヶ所の文学碑がある。先人の残した偉業を追体験し、この古き良き時代を懐かしみながら「内陸工業地帯」の一角を占める地域としても注目されております。これらを見ながら改めて新しい風を送り込んで頂ければ幸いに思います。

1. 大山街道沿いの文学碑

① 松尾芭蕉「代かい・・・」の句碑

- ・建碑：文政12年（1829）4月12日
- ・碑材：自然石
- ・場所：日蓮宗「宗隆寺」（JR南武線溝ノ口駅・田園都市線溝の口駅下車徒歩5分）。



（句 碑）

世を旅に

代かく小田の

ゆきもどり

（解説）大山街道沿いの薬屋「灰吹屋」二代目俳人玉川老人邸宝永（鈴木仁兵衛）が設立。句は元禄7年（1694）尾張の国に入った芭蕉が高弟家兮（かけい）らと旧交を温めながら詠んだ句。一生を旅に暮らす境涯を詠み、田植えの準備として田に水を張り、牛馬に田を掻き鳴らせる情景を見て、あたかも、「代掻き」のために人々が田を行ったり来たりする姿が、生涯を旅に暮らはいないが、宝永はこの歌が自分の境涯と酷似していたために建立した。初めは大山街道六軒町に、後七面山に移され、その後現在地に移された。

（2001年6月9日（土）神奈川新聞より引用）

② 濱田庄司生誕の地記念碑（濱田庄司ここに眠る）

・菩提寺：宗隆寺（JR南武線溝ノ口駅・田園都市線溝ノ口駅下車徒歩5分）

「濱田庄司ここに眠る」歌碑（宗隆寺境内）



（句 碑）

昨日在庵

今日不在

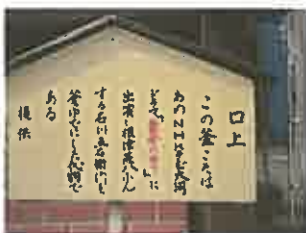
明日他行

（解説）濱田庄司は明治27年（1894）母の実家蘭方医太田家で生まれた。碑文は宗門第一の禅教本『碧巖録』第八十八則の「名工は細工の跡を残さない」による。生涯戸籍を高津区から移さなかった。

生誕の碑（JR南武線溝ノ口駅：片町十字路際）



濱田の碑は、娘婿の岡信孝画伯設計による台石で、上段に益子の赤色陶土、中段に釉薬の白色、下段に囲炉裏灰の黒色に石碑を支えている。



NHK大河ドラマ「黄金の日々」に出演した根津甚八さんがふんする石川五右衛門を釜ゆでしたものである。（左・中）

（右）光明寺は、慶長6年（1601）甲斐武田氏家臣小山田宗光開基になる浄土宗寺院である。大貫家も武田勝頼が天目山で敗れ、南二子に居住、官営18年（1641）幕府の命により二子塚より七軒百姓と共に、光明寺も現在地に移り、公用旅行者用宿場継立村となった。菩提寺の光明寺は第二次新思潮同人文学士大貫雪之助の墓所があり、交遊録を谷崎潤一郎は初期作品に数多く描いている。島崎藤村は雪之助の葬儀に参加して「若き大貫品川君の死」に書いている。雪之助妹が「大貫かの子」で明治39年（1906）多摩川の大洪水を泳いでプロポーズに来た岡本一平（政治風刺漫画家）と結婚し、一子岡本太郎を設けた。

③ 国木田独歩文学碑

- ・建碑:昭和9年(1934)6月23日
- ・碑材:自然石
- ・場所:高津図書館



国木田独歩文学碑

(句 碑)

歴遊の地を記念して

国木田独歩にささぐ

(昭和九年夏 島崎藤村志るす)

(解説) 柳田罔男、田山花袋、島崎藤村らから溝口について話しを聞いていた国木田独歩は、明治30年(1897)2月、渋谷道玄坂の住居から汽車で川崎駅まで行き、徒歩で溝口に来て、旅籠「亀屋」で一泊した。同行者に妻・佐々木信子(有島武郎『ある女』の主人公のモデル)が居たという説もあり、作品『忘れ得ぬ人々』は、春先の溝口の風景が叙情的に描かれ、独歩最高の傑作の一つになった。碑のきっかけは二子亀屋で川崎の陣屋に生まれの詩人佐藤惣之助が、二つの亀屋は紛らわしいので、青年団が溝口亀屋に独歩碑を建てて区別することとなった。平成10年(1998)高津図書館前溝口緑地に移設した。

(大山街道活性化推進協議会・高津区役所発行の「大山街道歳時記」より引用)

〔忘れ得ぬ人々〕：あらすじ

多摩川の二子の渡しをわたって少しばかり行くと溝口という宿場がある。その中ほどに亀屋という旅籠宿がある。ちょうど三月の初めのころであった。この日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しいこの町が一段ともの淋しい陰鬱な寒そうな光景を呈していた。昨日降った雪がまだ残っていて高低定まらぬ茅屋根(わらやね)の南の軒先からは雨滴(あまだれ)れが風に吹かれて舞うて落ちている。草鞋の足痕(あしあと)に溜まった泥水にすら寒そう漣が立っている。日が暮れると間もなくたいがいの店は閉めてしまった。闇一筋町がひっそりとしてしまった。旅人宿だけに亀屋の店の障子には燈火が明るく射していたが、今宵は客もあまりないとみえて内もひっそりとして、おりおろ雁頸の太そうな煙管で火鉢の縁を敲く音がするばかりである。

だしぬけに障子をあけて一人の男がのっそり入ってきた。長火鉢に寄っかかって胸算用に余念もなかった主人が驚いてこちらを向く暇もなく、広い土間を三步ばかりに大股に歩いて、主人の鼻先に突ったツた男は年ごろ三十にはまだ二ツ三ツ足らざるべく、洋服、脚絆、草鞋で烏打帽をかぶり、右の手に蝙蝠を傘を携え、左に小さな革包を持ってそれを脇に抱いていた。

〔以下略〕

④ 岡本かの子文学碑

- ・建碑:平成2年(1990)5月17日
- ・碑材:自然石
- ・場所:高津図書館前溝口緑地



岡本かの子文学碑

(解説)裏面に「岡本かの子、明治22年(1889)3月2日生。二子多摩川河畔、大賞家に生まる。若くして与謝野晶子に師事し、明星派の歌人として出発し、後に岡本一平と結婚する。その惜しみない献身と助力により、作家となり、わずか3年余の短い歳月に優れた小説を残し、昭和14年(1939)2月18日に没す。(以上の説明記事は大山街道活性化推進協議会・高津区役所発行の「大山街道歳時記」より引用。)

(句 碑)

うつらうつら
わが夢むらく
遠かたの
水晶山にふる
さくら花



(句 碑)

ととしにわが悲しみは深くして
いよよ草やぐ命なりにけり

(碑文: 亀井勝一郎 書: 川端康成)

(句 碑)

この誇りを

亡き一年とかの子捧ぐ
「誇り」無限の白鳥

岡本太郎作 (川崎市高津区二子神社内)



(大山街道活性化推進協議会・高津区役所発行の「大山街道歳時記」より引用)

2, 産業の歴史を訪ねて(株式会社 ミットヨ:世界的な精密計測器企業)



ミットヨ博物館



株式会社ミットヨ本社工場を正門から見る

長さや計測関連の歴史的資料や製品を広く世界から収集、展示している博物館です。産業を支える長さ計測、精密機器の変遷を知ることができます。また体験コーナーでは、はめゲージによるミクロの世界を身近に体験することもできます。(入館するには事前予約が必要です。連絡先:株式会社ミットヨ本社 総務部:tel)044-813-8201)

3, 二子の散策後「老舗料亭やよい」でお茶を飲みませんか

大山街道の二子・溝口は、江戸時代から継ぎ立て村として交通の要衝でした。また、二子は三業地として、大正から昭和にかけて大変な賑わいを見せておりました。二子界隈の歴史散歩を偲んだ後、老舗料亭「やよい」で抹茶を点ていただきます。

女将さんが料亭の室内調度品等を解説して下さいます。秋の半日、優雅な一時をすごしませんか。[さんぎょうちとは、芸妓置屋、待合、料亭の三業種営業が許可された区域のこと。関東大震災と二子橋の架橋をきっかけにつくられた花街「二子新地」は、昭和初期から昭和四十年代の間、華やかな賑わいを見せました。



老舗料亭「やよい」



二子神社

[大山ふるさと館主催: 二子の散策後「老舗料亭やよい」でお茶を飲みませんか……の概要]

・集合:田園都市線「二子新地駅」東口駅改札前

・散策コース:駅～二子渡し場～二子神社～光明寺～料亭「やよい」～駅・会費1000円。